

供養塚古墳出土埴輪について

— 砂礫観察結果を中心に —

奥田 尚・辻川 哲朗

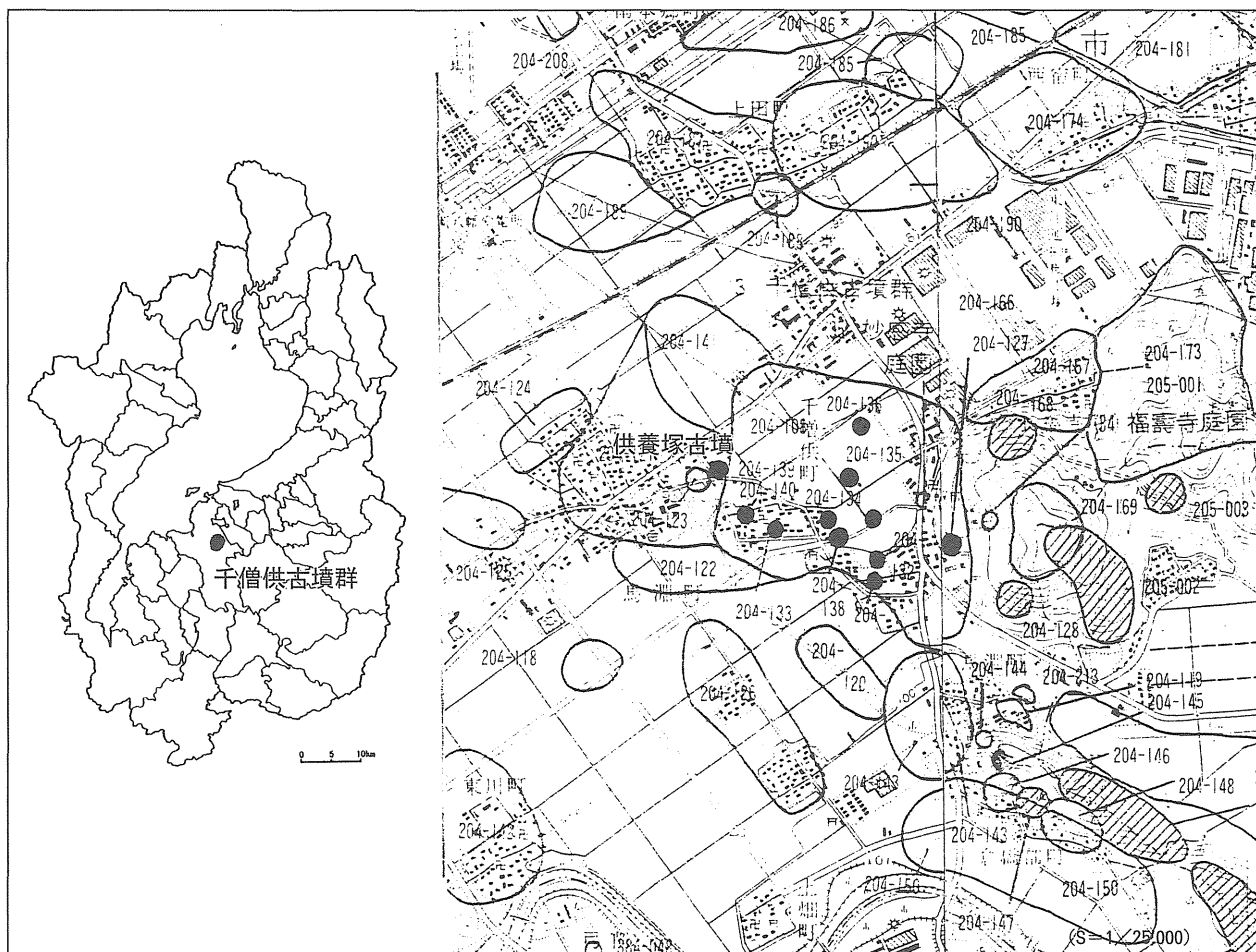
1. はじめに

供養塚古墳は、滋賀県近江八幡市千僧供(せんぞく)町一带に所在する千僧供古墳群を構成する一古墳である(図1)。昭和57(1982)年度に、県営ほ場整備事業にともない、周辺一带を含めた事前発掘調査が実施された。その結果、供養塚古墳からは多種多数の埴輪群が出土した。その調査成果を踏まえて、昭和59(1984)年3月30日に県指定史跡に指定され、現地において保存されている。

発掘調査後、諸般の事情により正式報告書は長らく未刊行であった。その間、断片的な資料の提示があったが、本格的な整理調査を経たものではなかつ

たため、その内容は必ずしも正確とはいえ、若干ながらも問題が生じていたことも事実である。

平成11~13年度にわたって、緊急地域雇用特別交付金事業の一環として、滋賀県教育委員会が主体となり、未整理・未報告資料の整理調査事業が実施された。その事業の一環として、本古墳群の重要性を考慮して、供養塚古墳を含む千僧供古墳群の整理調査が実施されることとなった。その整理調査の内容については、すでに『緊急地域雇用特別交付金事業に伴う出土文化財管理業務報告書』として刊行されている(辻川2002)⁽¹⁾。



住蓮坊古墳(204-136)、トギス塚古墳(204-137)、岩塚古墳(204-138)、供養塚古墳(204-139)、ジジババ古墳(204-131)、高ノ瀬古墳(204-132)、大將軍塚古墳(204-133)、張近古墳(204-132)、北出古墳(204-135)、ラカン塚古墳(204-140)

図1 千僧供古墳群と供養塚古墳の位置

筆者（辻川）は供養塚古墳の整理調査を担当したが、その整理調査の過程において、供養塚古墳の埴輪資料を対象とした埴輪検討会の例会を実施し、広く資料を実見したうえで、参加していただいた会員の方々から有意義なご教示を得ることができた。さらに、その際、筆者（奥田）による出土埴輪の砂礫観察を実施することができた。その結果については、諸般の都合により、上記『報告書』に掲載することができなかつたため、この場を借りて、結果を報告する次第である。出土埴輪を含め、遺構・遺物の詳細については、『報告書』を参照願いたい、遺構と出土埴輪について若干触れることにした。

なお、本稿は第2章を奥田が、それ以外を辻川が執筆し、最終的には辻川が編集したものである。

2. 遺構の概要

(1) 千僧供古墳群（図1）

千僧供古墳群は、近江八幡市の南西部に位置する。古墳時代中期から後期にかけて、瓶割山の西麓一帯に造営された大小10数基からなる古墳群である。これら構成古墳の大半は後世の削平によって地表に痕跡をとどめていないが、供養塚古墳をはじめ、住蓮坊古墳・トギス塚古墳・岩塚古墳の4古墳は、墳丘の一部を地表にとどめていた。発掘調査の結果、初期須恵器を伴う住蓮坊古墳→供養塚古墳が中期代に造営され、その後、トギス塚古墳→岩塚古墳の順で横穴式石室墳が造営されたことが判明している。現状では中期後半から後期前半頃に空白があるが、削平された古墳がこの間に充当する可能性が高く、中期から後期にかけて継続する首長系譜とみてよい。

(2) 供養塚古墳（図2・3）

供養塚古墳は短小な前方部をもつ前方後円墳である。墳丘は、後円部に小さな社が鎮座しており、その一帯が低平な高まりとして遺存する以外は、すべて削平されている。

墳丘の約半分程度にトレンチを設定し、発掘調査が実施された結果、墳丘とそれを取りまく周濠が検出された。墳丘の全長は約52m、後円部径約38m、前方部幅約24mをはかる。墳丘主軸はほぼ南北方向にそろえている。さらに東側のくびれ部には造出しが取り付けられている。造出しの位置など若干異なる点

はあるものの、周濠を含めた墳丘全体の平面形態が大阪府蕃上山古墳とほぼ同一規格であることが調査当時から指摘されている。遺存した墳丘斜面には、人頭大程度の葺石を葺いている。造出しは幅約8m・奥行き約4mをはかるもので、斜面には墳丘と同様に葺石が認められた。造出しの上面はほぼすべて削平をうけており、なんら痕跡を見出すことはできなかった。

埋葬施設については、周濠など墳丘周辺部の調査が主体となったため、不明である。ただし、『近江輿地誌略』には江戸時代寛文年間に発掘がなされ、石槨とおぼしき施設の存在や、鏡・鉄刀・玉類の出土があったとの記述がある。また、昭和8（1933）年には土砂採取中に小石室が発見され、そのなかから横矧板鋌留短甲1領と鉄器類が出土している（柏倉1934）。以上から、供養塚古墳の埋葬施設は、寛文年間の竪穴式石槨と思われるものと、昭和8年に発見された小石室と、あわせて2基の存在を知ることができる。今回、後者の小石室の位置について、検討をこころみた（図2・3）。柏倉氏の調査後、周辺の耕地整理が進み、地形が改変されていたが、昭和36（1961）年段階に撮影された空中写真には、柏倉氏による墳丘実測図の地割（図3のA～E）とほぼ同形の地割（図2のA～E）を見出すことができた。さらにこれに昭和59（1982）年調査時の墳丘実測図を重ねた結果、小石室は、おおむね後円部の中心付近から、やや南西よりに位置することが判明した。寛文年間に発掘された石槨の位置は不確定であるものの、これを後円部中心部（図3の蓋石付近）に仮定した場合、小石室はやや位置的に中心からはずれており、器財埋納を目的とする副次的施設である可能性がやはり高いと考える。

3. 出土埴輪の概要

(1) 概要

周濠内からは、多量の遺物の出土をみた。その内訳は、埴輪類（円筒埴輪・形象埴輪）・土器類（須恵器・土師器・緑釉陶器など）である。これらは、古墳に伴う一群と、それ以降周濠に流入した一群とにわけることができる。ここでは前者、そのなかでも埴輪を中心として概観する。出土した埴輪は、数

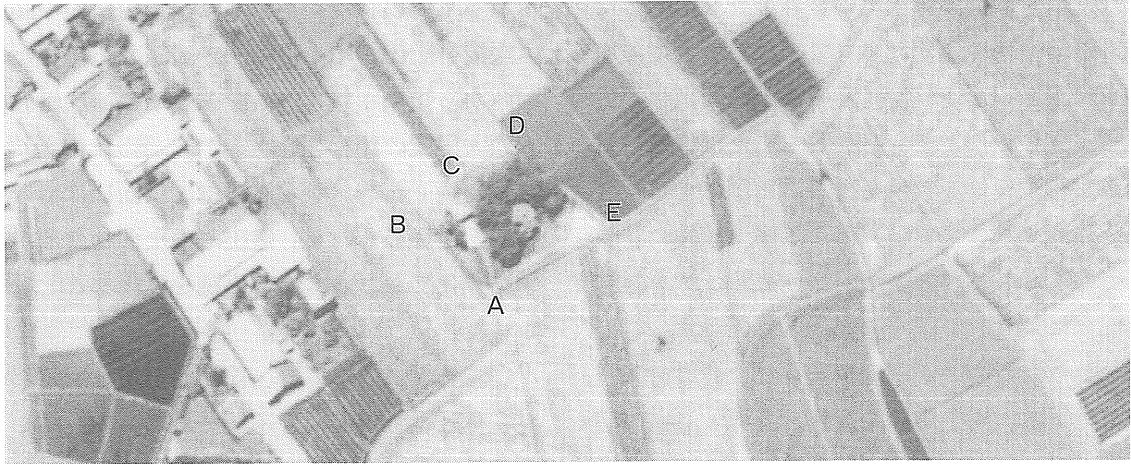


図2 供養塚古墳周辺の空中写真
(1961年撮影、C23-6621から拡大)

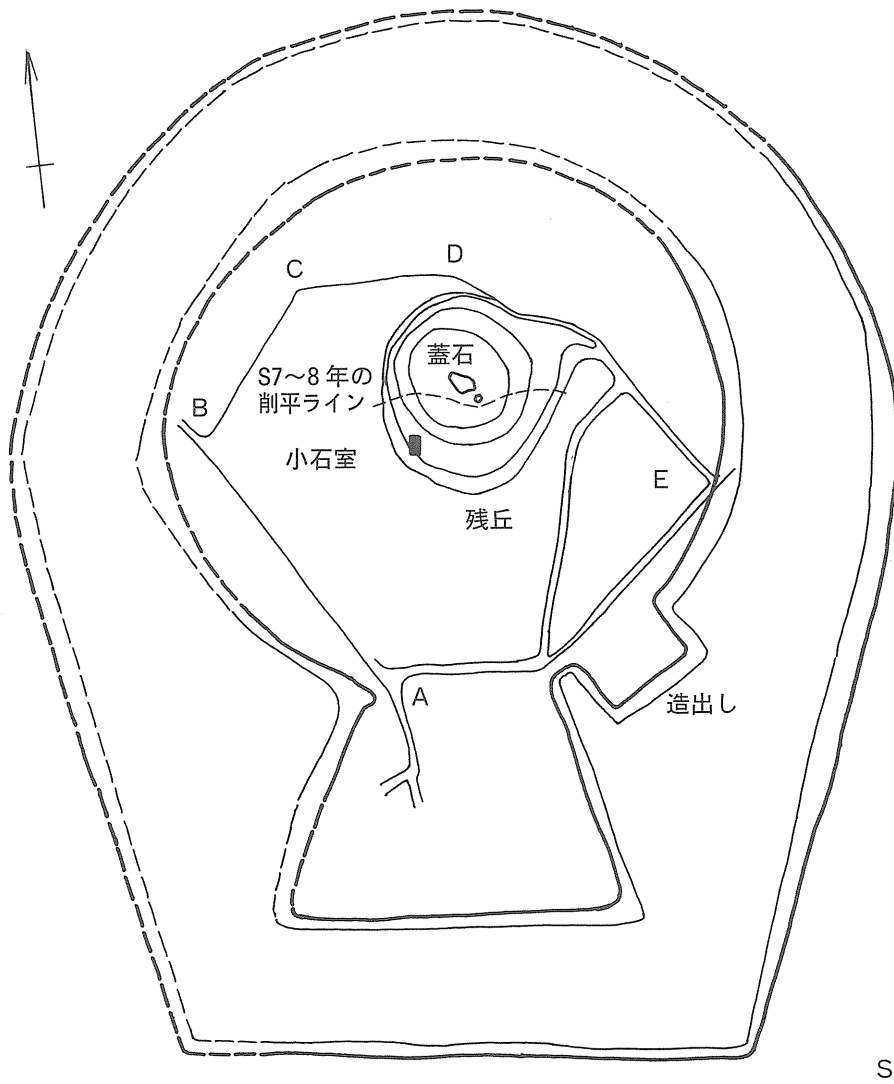


図3 供養塚古墳 墳丘測量図

(粕倉1938所収の挿図第6と1982年度の発掘調査時の平面図を合成した。辻川再トレース。)

紀 要

第 16 号

2003. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

量的に膨大であり、収納用コンテナ300箱以上に及ぶ。

(2) 円筒埴輪

普通円筒埴輪と朝顔形埴輪がある。焼成は、いずれも無黒斑で、須恵質のものを含む。形態についてみると、普通円筒埴輪の場合、全形をうかがえる例からは、7突帯8段構成と6突帯7段構成との2種類の段構成が存在することがわかる。これらの口径は、約39cm前後に分布の中心があり、大型品が主体を占める。突帯間隔は、普通円筒埴輪の口縁部高は9.6～10.0cm、胴部高は10.1～10.5cm、底部高は10.6～11cmにそれぞれ分布の中心が認められた。口縁部高 \leq 胴部高 \leq 底部高という関係にあるが、その差はわずかであり、おおむね各段間隔が均等であるとみて大過ないものである。それゆえ、上田睦氏のいう「百舌鳥・古市型」に相当すると考える(上田2001)。また、突帯の貼り付けに押圧技法を用いる例がある。スカシ孔については、『報告書』では、ほぼすべて円形としたが、刊行後、1点であるものの、半円形スカシの存在を確認している。外面調整は、2次調整としてB種ヨコハケ調整を施すものが主体的である。それ以外にも、底部などの一部の調整に2次調整を省略するもの、外面全体に省略するものも一定程度見出すことができた。B種ヨコハケは、一瀬和夫氏による細分案(一瀬1992)のBc種が最も多く、それについてBd種が続き、若干のBb種が認められた。

上記の諸特徴からして、円筒埴輪の所属時期は、川西宏幸氏の円筒埴輪編年IV期に相当するものとみて大過ないであろう。さらに、一瀬氏によるB種ヨコハケの変遷観では大山古墳から土師ニサンザイ古墳段階に位置づけられるものである。これは、供養塚古墳の造出し付近で出土したとされる初期須恵器²⁹がTK216～208型式に併行する可能性が高いことと齟齬をきたすものではないと考える。

(3) 形象埴輪

形象埴輪には、器財類(蓋形埴輪・靱形埴輪・甲冑形埴輪)、家屋類(家形埴輪・囿形埴輪?)、動物類(馬形埴輪・鳥形埴輪)、人物類(男性埴輪・女性埴輪)がある。それら以外に、器種の同定をなしえなかった不明埴輪が若干ある。

蓋形埴輪 周濠各所から出土しており、埴輪列中への配置が推測される。本古墳の蓋形埴輪は、笠部下端のみに突帯をめぐらし、中央部突帯を欠如すること、また、笠部外面に顕著な施文を施さないことなどを特徴としてあげることができる。

靱形・甲冑形埴輪 いずれも若干数の出土にとどまり、少数が局所的に樹立されていたと考えられる。

家形埴輪 造出しの対岸付近の周濠内から集中して出土している。十分な接合作業が未実施であるものの、現時点で少なくとも大小7個体程度の存在を確認している。さらに、器厚がかなり厚く、外面下端に突帯をめぐらす底部片があり、囿形埴輪に相当する可能性がある。

馬形埴輪 家形埴輪と同様に、造出し対岸付近の周濠内に集中する傾向を示す。全形を復元しうものがないが、重複する部位があるので、2個体以上存在したとみて大過ないと考える。これらの破片には、杏葉などの装飾具を残すものがなく、「飾り馬」でなかった可能性が高い。

鳥形埴輪 少数が出土したにとどまる。脚部の破片と鶏と思われる頭部の破片がある。

人物埴輪 少なくとも女性埴輪複数個体と、男性埴輪2個体分の存在を識別することができたが、これら以外にも複数の個体があることは確実である。男性の1体は裸足であり、力士埴輪の可能性もある。もう1体は頭上に冠様の表現をなした半身像である。(辻川)

4. 出土埴輪の砂礫(図4・5、表1)

近江八幡市の供養塚古墳から出土している埴輪の表面に見られる砂礫を肉眼で観察した。始めに裸眼で埴輪片全体を観察し、観察良好な部分を倍率30倍の実体顕微鏡で観察した。観察結果について述べると共に、埴輪に含まれる砂礫の採取地について述べる。

(1) 埴輪の砂礫について

埴輪の表面に見られる砂礫は岩片として花崗岩・流紋岩・砂岩・泥岩・チャート・火山ガラス、鉾物片として石英・長石・黒雲母・角閃石・輝石・橄欖石である。これら砂礫の特徴、砂礫構成について述べる。

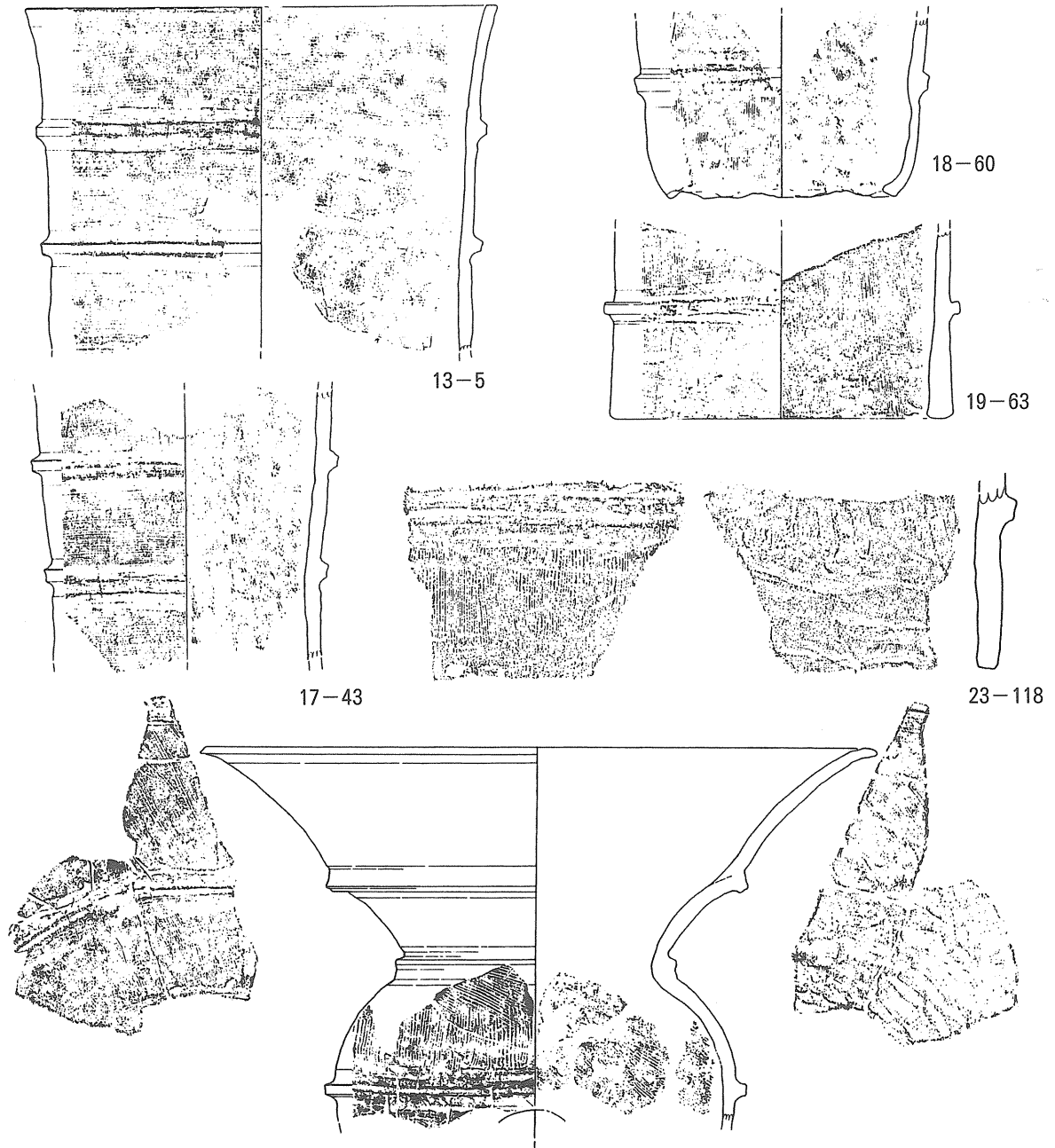


図4 砂礫を観察した埴輪 (1. 円筒埴輪) 縮尺は23-118が1/3、それ以外は1/6

花崗岩：色は灰白色で、粒形が角、粒径が最大0.7mmである。石英と長石が噛み合っている。

流紋岩：色は白色、灰白色、灰色、黒色、褐色、茶褐色、赤褐色、淡茶色、赤茶色、淡赤色と様々で、粒形が角、亜角、亜円、粒径が最大で4mmである。石基はガラス質である。

砂岩：色は灰色、褐色、淡緑色で、粒形が亜角、亜円、粒径が最大0.5mmである。細粒砂からなる。

泥岩：色は灰色、暗灰色、暗褐色で、粒形が亜角、

粒径が最大0.7mmである。

チャート：色は灰白色、灰色、暗灰色、褐色、暗褐色で、粒形が亜円、粒径が最大2mmである。

火山ガラス：無色透明、貝殻状で、粒径が最大0.7mmである。

石英：無色透明、粒形が角、粒径が最大1.5mmである。複六角錐あるいはその一部が認められるものもある。

長石：白色、灰白色で、粒形が角、粒径が最大1.5

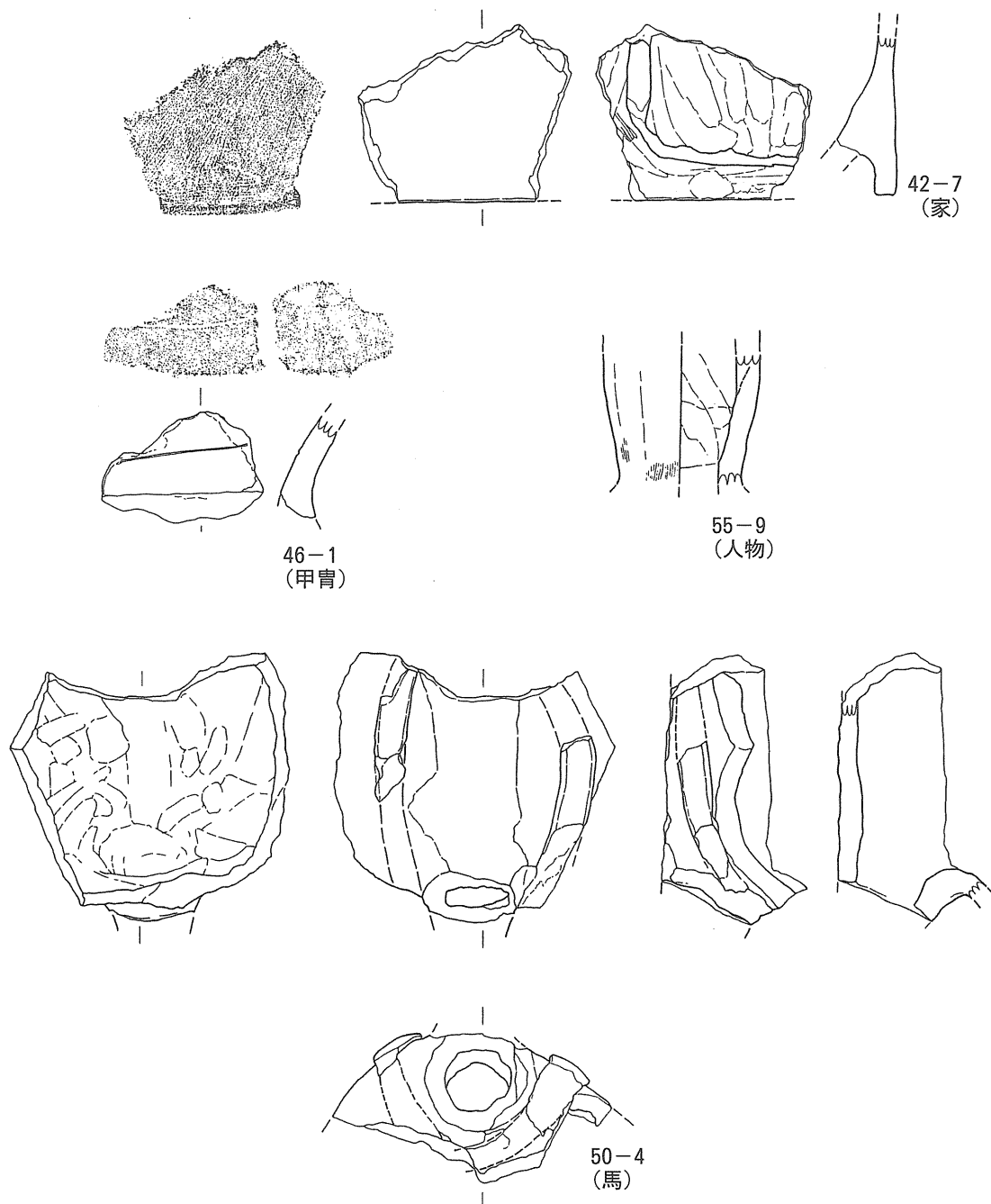


図5 砂礫を観察した埴輪（2. 形家埴輪） 縮尺は全て1/3

mmである。

黒雲母：黒色、板状で、粒径が最大0.2mmである。

角閃石：黒色、柱状、粒状で、粒形が角、粒径が最大0.2mmである。

輝石：暗緑色、粒状で、粒形が垂角、粒形が最大0.7mmである。

橄欖石：褐色透明、茶色透明で、粒状、粒形が最大0.7mmである。

以上のような特徴を持つ砂礫から、当古墳付近の岩石分布をもとにして砂礫種構成を求めれば、花崗岩質岩起源と推定されるI類型、流紋岩質岩起源と推定されるIV類型、堆積岩起源と推定されるVII類型に区分される。少量の砂礫種も考慮して細区分すれば、Id類型、Ibd類型、Ibdg類型、IVab類型、IVabg類型、IVb類型、IVg類型、VIIdfn類型、VIIdn類型に区分される。各砂礫種の特徴について述べる。

d類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主として、流紋岩質起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

bd類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

bdg類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

ab類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

abg類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・閃緑岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩・チャートを含む砂礫からなる。

b類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

g類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、砂岩・チャートを含む砂礫からなる。

dfn類型：碎屑岩起源とされる砂礫を主とし、流紋岩質岩起源の砂礫や他形の橄欖石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

dn類型：碎屑岩起源とされる砂礫を主とし、流紋岩質岩起源の砂礫や他形の輝石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

(2) 砂礫の採取地について

供養塚古墳が位置する南方の三上山には花崗岩が分布し、東方には花崗斑岩が僅かに分布する。また、東方や北方には流紋岩質岩が分布する。南方を流れている日野川の上流には砂岩や泥岩が分布する。北方を流れている愛知川の上流には砂岩や泥岩、塩基性凝灰岩が分布する。このような岩石の分布をもとに当古墳近くで砂礫の採取地を求めれば、I類型に属する砂礫は花崗岩が分布する付近の砂礫であることから三上山の北麓付近が推定され、IV類型に属する砂礫は当古墳東方の岩倉付近の砂礫と推定される。VII類型に属する砂礫は輝石や橄欖石が含まれることから塩基性岩の分布域の河川が推定され、八日市市の愛知川の砂礫と推定される。

供養塚古墳に使用されていた僅か13基の埴輪しか

観察しなかったが、砂礫組成からみれば、少なくとも3地域の砂礫で製作されているといえる。

(奥田 尚)

5. まとめ

今回の砂礫観察は、観察対象とした資料が13点と限定されているものの、その結果から、供養塚古墳の埴輪の砂礫組成には、少なくとも9つの類型があり、それらは大きく3つのグループに大別できることができた。さらに、それらの採取地を古墳の周辺にもとめると、三上山北麓付近、供養塚古墳東方の岩倉付近、八日市市域の愛知川付近にそれぞれ候補地を求めうる事が判明した。

供養塚古墳の円筒埴輪の諸特徴については、先に概述したとおりであるが、とくに大型品が主体的であること、典型的なB種ヨコハケ調整技法を採用していることなど、器形的にも、技法的にも、該期の近畿中央部—具体的には百舌鳥・古市古墳群の円筒埴輪との共通性を強く示している。該期の近江地域の円筒埴輪をみると、若干の例外を除けば、器形的には小型品が主体をなし、技法的にも整ったB種ヨコハケ調整をみることは稀である。このことは、供養塚古墳の円筒埴輪を製作した工人が近畿中央部の工人達との直接的な交流をもっていた可能性が高いことを示唆していると考えられる。この直接的な交流の具体像を明らかにすることは、該期の埴輪製作技術の拡散を知る上で重要な問題であるが、この場合、近畿中央部において製作された円筒埴輪が当該地域へ搬入されたという想定も理論上なりたつことになる。しかし、今回の砂礫観察結果からは、そのような想定が単純に成立しがたいことを示唆するものと考えられる。

本稿では、砂礫観察の報告を主眼としたため、供養塚古墳の埴輪群の評価については、まだまだ不十分であることは十分承知している。今後、周辺地域をも視野にいれて、再度位置づけを試みることを期して、稿を終えたい。

末筆ながら、埴輪検討会例会において、貴重な御意見、御教示を賜った会員諸氏に対して、厚く御礼申し上げる次第である。

(辻川)

(おくだ ひさし：奈良県立橿原考古学研究所)

(つじかわ てつろう：財団法人滋賀県文化財保護協会)

註

- (1) 以下、本報告書は記述の便をはかるため、『報告書』と略称する。
- (2) 残念ながら、本資料については、所在が不明であり、現物を確認しえなかった。それゆえ、以前に現地説明会資料において提示された実測図からの判読した所見である。

引用・参考文献

- ・一瀬和夫「古市古墳群における埴輪群の変遷－大型古墳を中心として－」『究斑－埋蔵文化財研究会15周年記念論文集－』埋蔵文化財研究会 (1992)
- ・上田 睦「古市古墳郡を中心とした古墳時代中期前半期円筒埴輪の規格」『堅田直先生古稀記念論集』真陽社 2001
- ・柏倉亮吉「供養塚古墳」『滋賀県史蹟調査報告第6冊』1938
- ・鐘方正樹「中期古墳の円筒埴輪」『史跡大安寺旧境内』奈良市埋蔵文化財研究報告第1冊 奈良市教育委員会 1998
- ・辻川哲朗「円筒埴輪の突帯設定技法の復元－埴輪受容形態検討の基礎作業として－」『埴輪論叢』1 埴輪検討会 1999
- ・辻川哲朗「2-10 滋賀県指定史跡 千僧供古墳群」『緊急地域雇用特別交付金事業に伴う出土文化財管理業務報告書』滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会 2002

表1 供養塚古墳出土埴輪の表面に見られる砂礫

挿図番号	実測番号	器種	岩 石														鉱 物										海綿の骨片	類 型								
			花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石					輝石						
			裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍				裸眼	30倍					
-	106	円筒埴輪		M稀角				M稀亜角											S僅		S多		S稀板										I d	三上山麓		
23-118	673	円筒埴輪		M稀角				M稀亜角		M稀亜円									M-僅E稀		S多				S稀								I bdg	三上山麓		
13-5	267	円筒埴輪		M稀角				M稀亜角											M-僅		M-多				S稀								I bd	三上山麓		
18-60	676	円筒埴輪					L-僅亜角	L-中亜角	M-稀亜角	M稀亜円				L-稀亜円				M-微	M僅E中	M-僅	M微												I g	在地		
19-63	49	円筒埴輪		L-稀角			L-僅亜角	L-稀亜角		M稀亜円								M-僅	M-多E僅	M-僅	M-中				S稀								I abg	在地		
17-43	287	円筒埴輪					L-僅亜角	M-多亜角										M-中	S中	M-微	S中				S稀								I b	在地		
18-53	684	円筒埴輪		M稀角			L-僅亜角	L-僅亜角						L稀亜角	M稀亜角				M-僅	M-多E僅	M-微	S僅		S稀板	S稀									I abg	在地	
30-2	731	朝顔形埴輪					M-稀亜角	M稀亜角											M-中E僅	M-僅	S多				S稀									I bd	在地	
42-7	106	家形埴輪						M-微亜角		M微亜角	M僅亜角							M-僅	M-中E微	M-稀	M-僅					M稀E稀								I dn	愛知川	
-	172	蓋形埴輪						M-僅亜角		M僅亜円	M僅亜角						M稀貝		M-中E微		M-僅					M稀									I dn	愛知川
46-1	339	武人埴輪					L-稀亜角	L-僅亜円		M稀亜角	M微亜角							S僅	M-多E僅		S微				M稀									I dfn	愛知川	
55-9	250	人物埴輪		S稀角			L-稀亜角	S稀亜角											S中E稀	S稀	S多				S稀									I bd	三上山麓	
50-4	5	馬形埴輪		M稀角			L-稀亜角	L-微亜角											S稀	M-多E僅	S僅	S中				S稀									I bd	三上山麓

* 挿図番号は『報告書』記載のもの。図版番号-遺物番号をさす。表示のないものは未掲載分である。

編集後記

今年度も、全国の遺跡で数多くの発見が新聞紙上を賑わせました。県内においても、膳所城下町遺跡・鍛冶屋敷遺跡をはじめとして多くの遺跡調査で成果を挙げることができました。そして現地説明会では、多くの考古学ファンや地元の方々に見学していただくことができました。

今号に掲載されている論考は、遺構・遺跡論から保存科学と幅広く、多岐にわたり、今年度の発掘調査に関連する最新情報や成果を反映させたものも含まれています。これらの論考が、埋蔵文化財の調査に携わる者の一助となり、我々の仕事である文化財の保護・普及活動の一翼を担っていくものと信じております。

m()m

平成15年(2003年)3月

紀 要 第 16 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

電話 (077)548-9780・9781

FAX (077)543-1525

URL <http://www.shiga-bunkazai.jp/>

E-mail mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本 (株)スマイ印刷工業

栗東市川辺568番地2

TEL 077-552-1045